

イタケスクス・スイミング・センター (Itäkeskus Swimming Hall, ヘルシンキ, フィンランド)

年間 40 万人が使用すると言われているイタケスクス・スイミング・センターは、ヘルシンキの中央駅から地下鉄で 8 つ目のイタケスクス駅から歩いて 10 分程の所にある。総延べ面積 1,325m²、緊急時収容人員 3,800 人の地下施設である。空洞の設計でまず目を惹くのは、中央の 16m×26 m の矩形の岩の柱であり、この周りを 5 つのいろいろなプールが配置されている。ここには、5 レーンの 50 m プール、子供用プール、治療用(リハビリ等)プール、冷水プール、温度が 27~34℃に保たれたジャクジプールがある。この他に、7 つのサウナ室(6 つの乾式フィンランドサウナ、1 つの湿式トルコサウナ)、カフェテリア、日焼け室、機械ジム、フィットネス室、打合せ室、治療とリハビリ室、シャワー室、脱衣室やロッカー室などが設置されている。

この施設での特徴は、例えば、機能的な床レベルの配置、選び抜かれた材料、十分な換気と適当な照明など、質の高いサービスとアメニティを提供できるように設計されている。間接照明を主体にしている室内は、白く着色された吹付けコンクリートに当てられた白色光が、掘削面の起伏がほど良い陰影を作りながらも、中にいる人たちの周り全体が光に包まれているような雰囲気を作り出している。袋小路を感じさせない地下空間の配置、威圧感を与えない天井の高さ(14 m)、空洞の広がりや演出している照明、内部のインテリアの配色と配置、その蔭に隠れるようにさりげなく配置された吸音盤、28~30℃に保たれた空調設備等、こうした個々の要素が重なり合って地下空間特有の閉鎖感や緊張感を解きほぐしてくれ、快適な空間を作り出している。こうした空間の設計には、地下空間自身が有する環境と人の感性を知り尽くした建築家の細かい気遣いが端々に見受けられる

(Kurhunen 氏談)。そして、偶然、彼らの設計した国立新オペラハウスで音楽や近代バレエの観賞することとなったが、オペラ劇場とこのプールには共通する快適さを感じることができる。また、このスイミング・プールは緊急時には 3,800 人分のシェルターとして活用されるとのことであるが、地下シェルターをアメニティ施設として利用する場合とアメニティ施設をシェルターとして利用する場合の違いを理解することができる。



写真-3(a) 地下式プールの入口(イタケスクス・スイミング・プール)



写真-3(b) 地下式プールの内観(イタケスクス・スイミング・プール)



写真-3(c) 地下式プールの内観(イタケスクス・スイミング・プール)